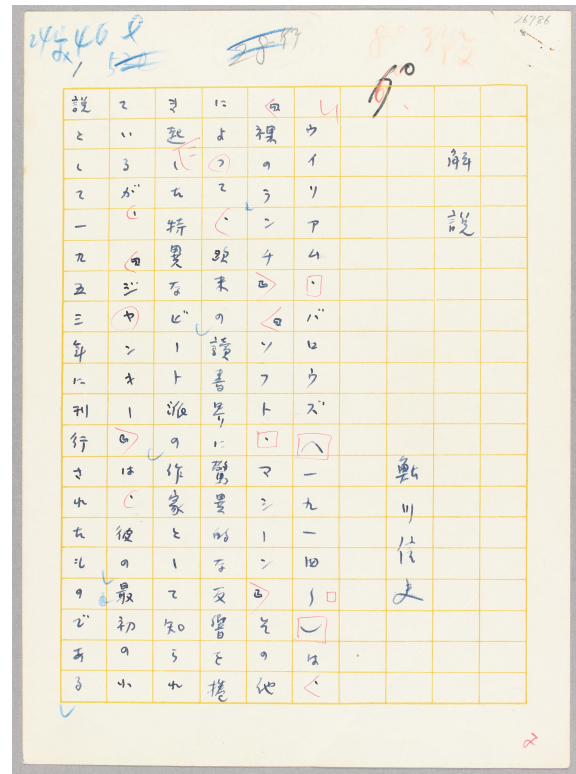


＜早稲田の本棚から＞館蔵資料紹介

鮎川信夫「解説」（稲門ライブラリー）

桑垣 孝平（戸山図書館）



稲門の文学者である鮎川信夫（1920—1986）は、戦後詩史における最も重要な雑誌の一つ『荒地』の同人で、優れた詩や批評、評論を残したが、英文学の翻訳者としても活躍した。彼が翻訳したアメリカの作家にウィリアム・S・バロウズ（1914—1997）がいる。第二次『荒地』に続き、年刊『荒地詩集』が出版された1950年代、アメリカではビート・ジェネレーションと呼ばれる文学者たちが、冷戦下の息苦しい社会にあって、向う見ずな生活を送りながら、内容、スタイルともに規範に縛られない作品群を発表した。バロウズはビート・ジェネレーションを代表する作家の一人で、自身も属していた、麻薬中毒者や同性愛者の世界を文学に持ち込み、また、既存のテキストを切り刻んで繋ぎ合わせるカット・アップと呼ばれるテクニックを駆使し、露骨——当時としてはだが——で、実験色の強い作品を書き、カウンターカルチャーのアイコンになった。鮎川は、まず彼の代表作『裸のランチ』を、それから処女作『ジャンキー』を翻訳した。今に比べ情報が乏しい中でなされた訳出の優秀さは、鮎川の没後、日本におけるバロウズ紹介を刷新した翻訳者／評論家の山形浩生（1964—）も認めるところである。この手書き原稿は、鮎川による『ジャンキー』の解説で、作品背景が簡潔に述べられている。掲載先を示す印や記載はないが、読点の位置を除き、完全に一致するテキストが、雑誌『血と薔薇』2号に確認できる（同号には11、12章の抄訳が掲載された）。『血と薔薇』は、アモラルで博覧強記の文学者、澁澤龍彦（1928—1987）が責任編集した雑誌で「エロティシズムと残酷の総合研究誌」という副題に違わず、誌面は邪まだった。バロウズ自身の麻薬遍歴を乾いた文体で綴った自伝的小説にとって、これほどふさわしい掲載誌はなかっただろう。「鍵のかかる女」、「悪魔のエロトロギア」、「殺人機械」といった言葉の並ぶ目次に「ジャンキー——回復不能麻薬常用者の告白」とあるのは、座りが良い。鮎川は「麻薬不感症」というエッセーの中で自らのヒロポン経験に触れ、嗜好心が湧かなかつたと述べ『裸のランチ』や本書を訳していた頃に思いを馳せる——「文学もまた麻薬みたいなものだとは度々思ったか、知れやしない。文学という一生の毒に、みずからの身心が、どこまで深く蝕ばれているかは、むろん、自分では測りようがないのである」。戦中、戦後を文学と共に生き抜いた者の言だろう。

主要参考文献

牟礼慶子『鮎川信夫：路上のたましい』思潮社 1992

山形浩生『たかがバロウズ本。』大村書店 2003

文藝別冊『澁澤龍彦：総特集』（増補新版）河出書房新社 2013